

正法に忠実なれ

一。広大なる正法、真実の教、絶対唯一の教法を、その正法自身が坐する高き尊き聖座にあらしめて、身を低く大地に合掌して、汝のあるべきところにあらしむる日に、まことに大事を大事たらしめたのである。

一。正法に忠実であれ。

恭敬といい、帰依といい、帰命という。すべて汝の正法に対する自由主義を捨てて、盲従にもあらず、反逆にもあらず、大法自爾の聖意を領解して、大法自然の威力のままに、必然に、如実に生きること以外ならず。

一。正法に忠実であれ。

もしこの一事にして忽ゆるがせとなり、事を自力妄想によつて決すれば、必ず後に一小些事、つまらぬことが大事となつて身にせまるであろう。しかるに正法に忠実なれば、いわゆる大問題も、雪達磨だるまの春風にとけるがごとく、簡単な問題となるであろう。

一。正法に忠実なれ。

一大事とは汝が正法に不忠実なることであり、一大事とは汝が正法に忠実なることである。いかなる聖賢も、正法に忠実なることより外に生れなかつたし、いかなる大逆も、正法を正法と知らず、正法を正法とせざることより外には生れず。

世に愚を愚と知らざる愚者より不幸なるものなく、宿縁あなくして正法に値あわざるより大不幸はなし。いとも悲しきは、正法に値あいつつも耳に入らず、心に徹せざる人の相である。

一。正法に忠実なれ。

今日の生活がなぜ暗いか、ただ大法を聞かぬがためである。今日の生活が何故味気ないか、ただ大法が生きて下さらぬがためである。

こんな悲しい身の上が、こんな大事件に出会つた自分が、御法を聞いたくらいで明るくなるものか。そう思う心が根本のまちがいである。すでに大法によつておこるどんな場合をも拜ませて頂いて言うことである。いかなる深刻な悩みも問題も大法の前には融ける。ただ大法に忠実であれ。

一。正法に忠実であれ。

暗い家庭、二十年も三十年も一緒に暮して来た夫婦が未だに一つになれず、別々の世界にあつて、終生かけてこの結婚を悔い、兄弟姉妹の仲が悪く、親に悪く、あわれ仇敵かたきの出会いの如き家庭。じめじめした生存の中で、誰も彼も、何とかならぬかならぬかとあせりつつ、おたがいに悪く言いあつて生きる。

それでは千万年たつても解決がつくものではない。その中から一人、真に正法を聞く人よ出でよ。そして光をとらせ。必ず浄土に通ずる家庭が生れる。人を治めよう

とするかわりに、正法に治められ、沈黙して念仏の一道を歩む人のみ、正法の持つ大慈悲の力によって、家を埋むる氷を融かして、美しき華を咲かしむるに至るであらう。

一、正法に忠実なれ。

汝、順境の日に正法に忠実なれ。順境五欲のほしいままなる日に、正法に忠実なるを忍という。

汝、逆境の日に正法に忠実なれ。逆境悲愁の日に正法に忠実なるを忍という。

正法の綱格に一体に生きずして、何の忍ぞ、何の精進ぞ。

苦悩の中、正法に忠実なれ。必ず、苦悩こそ汝をして不退金剛の人たらしむる尊き資糧たりしことを、必ず、涙の中に感謝する日のあることを断言す。

汝をして無意味に人生を徒食せしめ、汝を後悔の淵にあらしむるものは「正法なき順境」と知れ。されど正法なき逆境は汝を無明愚痴の迷路に殺す。

死活の岐路は、ただ正法の有無にあり。故に、正法に忠実なれ。

一、正法に忠実なれ。

多くの御弟子にとりまかれたもう聖人も聖人なり、一人悲しくさびしき配流の日の聖人も聖人である。されど一人にしてついに一人ならば、流転の一人にして、その一人は無意味である。我らの世界というも、一人、真の一人ならず、一人一人、獲得真心の白道に生きて、そこに展開されたる我らの世界ならずば、我らの世界というも、ただ雑毒雑居の世界に過ぎず。

真の一人の人、それは、ただ正法によつてのみ生る。

我が最大唯一なる慶びは、かくの如き正法に忠実なる一人を、如来によつて賜うたことである。この鴻恩、千万載、粉骨碎身して報謝するも、報ずる能わず。我がこの至幸至福、身のおきどころなきを覩ずる朝なる哉。

一、正法に忠実なれ。

汝の言、何故に人を動かさざるか。汝、正法によつて動かぬが故である。ある日には正法に忠実なるが如く、ある日には正法をぬきにして立場にものを言わせて、人を威圧し屈服せしめんとす。仏道というも名利のみ。

名利心、凝視すべく、名利心によつて妄動するなかれ。真の名利、汝より去る。人は高く売らんとする人を高く買わず。弊衣弊屋にあるとも、正法に忠実なる人は必ず世の人の仰ぐところとなる。

このこと一事体解せられずば、百年仏法を聞くとともに、学ばざるに^{ひと}齊し。

一、正法に忠実なれ。

法には必ず、体あり、相あり、用あり。用とは法よりおこる利益のことである。一句の法に利益あり、一言の法に利益あり。まして正法をや。故に経には、為得大利、為失大利とあり、本典には恵以真実之利とあり。

この人にしてこの法に忠実なれば、一足先きに大利益あつて待ちつつあるに、貪欲に縛られて正法にしたがつて歩まず。幸福去り、不幸来るに知らず。智者、人を見て危むはこれがためである。貪欲、まず幸福をつかまんとして、得られざるに至つて愚痴をならべる。

法に利益あるを知つて、利益を先として、法を功利的に使わんとするを自力という。このこと法界の道理許さず。ただ正法に忠実なれ。この功利心を智慧光によつて捨てしめられるところ、大道現前して、利益を得ずとも、生きねばならぬ世界、明かとなり、利益の方より「ちよつと待ちませ」と追いかけて来るに至るであろう。利益なく、思うようにならぬ時、聞法精進を止むる哀れなる人に呈す、ただ永遠に正法に忠実なれと。

一。正法に忠実なれ。

正法に忠実なるものは廣大難思の慶心を獲ん。廣大難思の慶心とは、願力廻向の信心に外ならず。正法を聞くこと即ち如来本願を信ずること、この聞信一如の境を第十八願の世界という。

仏教に随順し、仏願に随順するところ、恒沙の諸仏、この人を護念証誠したもう。これを仏語に随順すと名づく。これを大千世界感動すという。迷妄の巷、いかに浮身をやつして泡沫の如き人の称賛を博せんとするも、汝の胸中、不滅永遠の聖火燃えさば、何ぞ天神地祇、恒沙諸仏の感動すべき。一人感動するものなくば万人感動せず。

3

己を知らざる万人の悪罵は忍ぶべし、己を知れる一人の人の尊敬は大地よりも重し。一仏一聖賢の感動は三千大千世界よりも廣大である。このことなくして汝に真の歡喜は許されず。

正法に忠実なる人のみ、三仏三随順の世界にあつて、真実のよろこびを体解するであらう。

一切人よ、まず正法に忠実なれ。